

蕪村記念賞 「白桃の誉れ」

初ものの白桃いつの間にか古稀

宮崎県宮崎市

日高まりも

本賞は「自由題の部」「前書俳句の部」の両部門を通じ蕪村顕彰の視点から評価する賞として、第十二回大会からあらたに設置されました。

評

【塩見】「初ものの白桃」の清新な空気、瞬間を感じる初々しさ。「いつの間にか古稀」という老いの自画像を取り合わせるにより、人世を鷹揚に受け止める観想を湛えた、味わい深い一句。

【山田】古来桃は不老長寿の果実と言われていた。白桃はほんのりと桃色の初々しい肌を思わせる。「初ものの白桃」とは若々しさの象徴でもあるのだ。そんな白桃という季題により作者の「いつの間にか古稀」となったという人生への感慨が尚更強く響いて来る。破調の調べと「古稀」という止めの切れの良さと一句のリズムの面白さが印象的。

【田中】白桃へとひたと心を寄せ、一転してみずからへと思いが向くのだが、唐突なようできて軌跡が自然なものとな得できるところが秀抜。

【山尾】掌の白桃はなんと初々しく、同時になんと傷つき易そうなことか。作者はその白桃に自己を重ね、純真であった頃、その為に傷付いた折々をふと顧みて、自分が既に古稀であることを改めて実感している。白桃に作者の内面がしみじみと投影された一句である。

「初もの」の初々しさ、「白桃」の清純と柔らかさがまず印象付けられたかとおもうと、一転して「古希」の語で老齡の愁えと、人生の高みを言い切る句法は絶妙。「いつの間にか」は日常的言い回しながら、「無常迅速」を匂わせる。やや破調気味で、末尾で唐突に「古希」とK音の固い響きがあって、上・中と対照的、かつ効果的。

女性の立場、男性の立場、いずれによっても十分に深い鑑賞を可能にする。また、時間、年齢の推移を一句に言いとる視点は、蕪村的ともいえる。（関西大学名誉教授 藤田真一）